

## スポーツマネジメントに関するゼミナール活動の報告 — 遠隔教育を通じた実践に着目して —

北島信哉<sup>1)</sup>

### Report on seminar activities related to sports management - Focusing on practice through distance learning

Shinya KITAJIMA<sup>1)</sup>

#### 1. はじめに

本年度、コロナ禍の影響により、全国の大学でも多様な授業実践がなされてきた。本学においても授業が、対面授業からオンライン授業へと変更された。その後、対面授業とオンライン授業の併用を行う等、多様な授業形態の変更が行われた。本稿では、筆者が実践したスポーツマネジメント分野の専門ゼミナール授業を事例とした。本授業では、遠隔教育を通じたアクティブ・ラーニングとしての問題解決型学習(PBL: Problem Based Learning)の実践、合同ゼミ、プロジェクト学習の実践報告を行う。

今回、実践した問題解決型学習(PBL: Problem Based Learning)とは、「実世界で直面する問題やシナリオの解決を通して、基礎と実世界と繋ぐ知識の習得、問題解決に関する能力や態度を身に付ける学習」(溝上・成田, 2016, pp8)である。この授業の学習ステップは、図1の通りである。授業では、プロスポーツクラブと連携し、現在、このクラブが直面している課題に対する取組を実施した。

またプロジェクト学習とは、「学生の自己主導型の学習デザイン、教師のファシリテーションのもと、問題や問い、仮設などの立て方、問題解決に関する思考力や協働学習等の能力や態度を身につける」(溝上・成田, 2016, pp11)である。この学習は、「学生版の研究活動(research)だと言われることもあるが、それはプロジェクト学習が、研究者が行う研究のステップを近いかたちで採り入れているからである。」(溝上・成田, 2016, pp10)、と説明している。この学習ステップは、図2の通りである。そして、本授業では、この学習を遠隔システム活用したゼミナール学生の研究テーマ発表という形で実施した。

そして、本研究では、遠隔教育を通じたゼミナール運営の実践報告を行うと共に、これらの実践を通じた成果や課題も明らかにすることとした。

#### 2. 研究方法

##### (1) アンケート調査の実施

本年度から実施した遠隔教育の実践の成果と

---

1) 共栄大学 国際経営学部

Kyoei University, Faculty of International Business Management

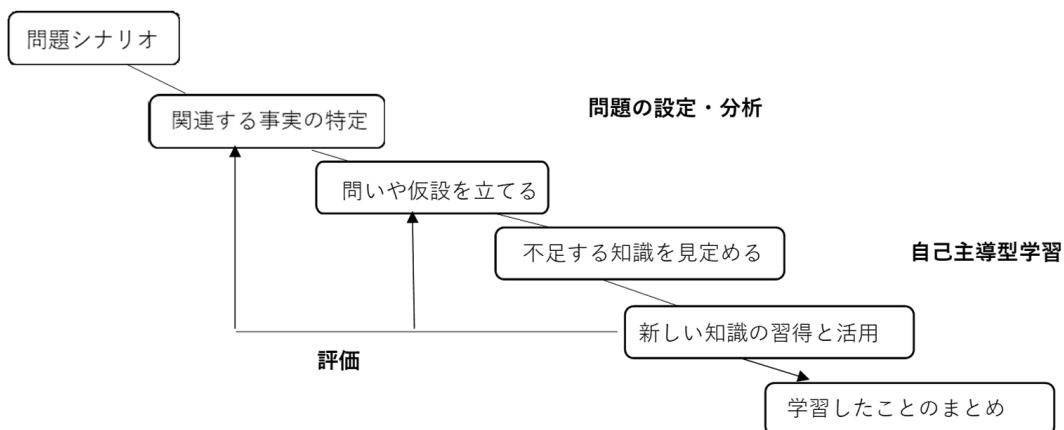


図1. 問題解決学習のステップとサイクル

資料：溝上慎一・成田秀夫「アクティブラーニングとしてのPBLと探求的な学習」(2016), 図1-2 (P9) を基に作成

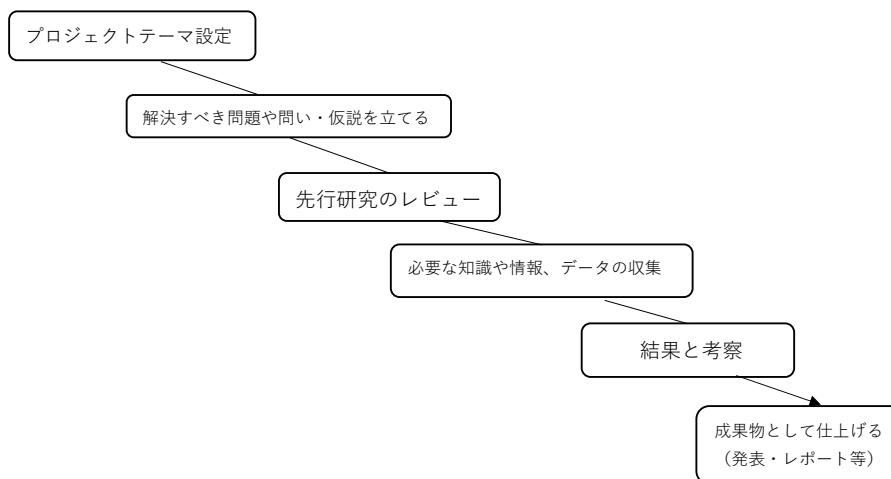


図2 プロジェクト学習のステップ

資料：溝上慎一・成田秀夫「アクティブラーニングとしてのPBLと探求的な学習」(2016), 図1-2 (P11) を基に作成

課題を明らかにするため、プロスポーツクラブと連携した問題解決学習への取組み、他大学との遠隔教育に対する感想に対するアンケートをゼミナール学生対象に行い、自由記述回答を求めた。またプロジェクト学習については、オンライン上での発表者に対して、発表者以外のゼミ学生からの遠隔システムを通じた質問や教員からの指摘事項に対する感想を求めた。

## (2) 分析方法

本研究では、テキストマイニングを用い、授業実践に対する自由記述のアンケートを基に分析を実施した。

テキストマイニングとは「自由記述のような文書形式のデータを定量的な方法で分析する」(牛澤, 2018, p1) ことである。今回は、KHコーダーという「アンケートの自由記述・インタビュー記録・新聞記事など、さまざまな社会

調査データを分析」するためのソフトウェアを活用した。そして、遠隔教育を通じたゼミナールの実践に対する学生の感想を「定量的に要約して示すこと、あるいは理解すること」(牛澤, 2018, p1) を実施した。

### (3) 調査対象

調査は、専門ゼミナール I 履修者 23 名を対象に実施した。このうちプロスポーツクラブと連携した問題解決学習へ参加し、アンケート回答を行った 21 名、他大学との遠隔教育による合同ゼミに参加し、アンケート回答を行った 16 名、プロジェクト学習として遠隔システムによる発表を行い、アンケート回答を行った 20 名を対象とした。

## 4. 授業概要

### (1) 専門ゼミナール I の前期授業実践

専門ゼミナール I は 3 年生を対象にした授業であり、前期授業は、非対面によるオンデマンド授業を実施した。授業では、スポーツマネジメント・ビジネス関連研究について学習を実施した。授業形式は、各回の授業において、スポーツマネジメント・ビジネス関連の資料を教員が Microsoft Teams 上に掲載し、学生はその資料をダウンロードし、学習を行った。そして、その資料内容に関する課題提出を行った。授業内容等への質問は、Microsoft Teams のチャット機能を利用して実施した。そして、次回の授業

表 1 前期授業の主なテーマ

前期授業の主なテーマ
・プロ野球チーム広報の仕事
・トップスポーツと観戦行動
・海外で活躍する日本人プロアスリート
・野球の独立リーグ、四国アイランドリーグの取組み
・3×3バスケットボールの取組み
・東京オリンピック・パラリンピック×地域
・スポーツによる地方創生
・プロスポーツクラブが行うホームタウン活動
・実業団チームが行うホームタウン活動
・運動部活動マネジメント

では、学生から提出されたレポート課題を紹介しながら、授業内容の解説をパワーポイントに音声が付記するオンデマンド形式で実施した。前期授業の主なテーマは表 1 の通りである。

### (2) 専門ゼミナール I の後期授業実践

後期の授業では、オンデマンド形式の授業と対面形式の併用を実施した。オンデマンド形式の授業では、ゼミナール学生が各自の研究テーマに関する発表を Microsoft teams において実施した。ゼミ学生の遠隔教育環境から、オンタイムでの双方向授業の実施は行わない授業運営を実施した。発表者は、期日までに発表資料をパワーポイント形式で作成した上で、Microsoft teams を利用し、発表資料を教員に送付することとした。そして、発表者以外の学生は、オンデマンド授業時に、学生の発表資料と教員からの音声付き資料を Microsoft teams 上からダウンロードし、各自学習を行い、発表資料に対する質問、意見等を Microsoft teams の投稿機能に書き込みを行った。そして、発表者はその書き込みされた質問等について、図 3 の通り、回答を行う形式で双方向の意見交換をオンライン上で実施した。

### (3) 遠隔授業を通じた大阪成蹊大学との合同ゼミ実践

後期授業の対面授業時には、他大学との合同ゼミを実施した。2020 年 11 月 26 日に大阪成蹊大学との遠隔システムを活用した合同授業を実施した。この授業では、アクティブ・ラーニング形式の授業として、Google meet を活用した。

テーマは、オリンピック、パラリンピックのレガシーである。合同授業を実施する前に、大学毎に、オリンピック・パラリンピックに関する共通の新聞記事を読み、授業に参加した。学習した新聞記事内容は次のようである。①五輪の意義、②長野オリンピック契機に実施された国際交流プログラムである一校一国運動、③東

(例 1)

■さんへ質問

コロナウイルスが流行している間、選手たちはどのように練習していたのですか？

■

自粛期間中は家でトレーニングをしていました。実際にSNSなどでトレーニング風景をアップしていました。全体練習再開後はソーシャルディスタンスと言った感染拡大防止の対策を取りながら、トレーニングに励んでいます。

(例 2)

■さんへの質問です。

スノースポーツの一つとしてスキー合宿などが挙げられていますが他のスノースポーツでの人口増加の対策などもありますか？

■

若者向け(18～22歳)はリクルートで雪マジというサービスを提供しています。これによって18.19歳は無料、20～22歳は半額でリフトに乗れることが対策の一つになっているのではないかと考えています。

図 3 オンライン上での学生間の質疑応答例

京オリンピック、パラリンピック開催に伴う新設競技場の大会後利用問題という3つの新聞記事である。

合同授業では、2020東京オリンピック・パラリンピックのレガシーとして、大会組織委員会のアクション&レガシープランの柱である①スポーツ・健康、②文化・教育、③復興・オールジャパン・世界への発信、④街づくり・持続可能性、⑤経済・テクノロジーの視点から、「2020年東京オリンピック・パラリンピック後に日本に残したいもの。」という問いを合同授業課題として授業を展開した。各大学の授業で上記①～⑤のテーマ毎にグループを分け学習を実施した。そして、グループ毎に遠隔システムを利用し画面上で発表、質疑応答を実施した。そして5つのテーマに対する質疑終了後に各教員による授業のまとめを行い、授業を終えた。授業終了後、学生は、Microsoft teams上の課題から感想を記入し提出を行った。

#### (4) 外部講師を招聘による遠隔システムを活用した問題解決型学習

卓球リーグ所属のT、T彩たまとの連携事業として、問題解決型学習の実践を行った。

この授業の実践内容は表2の通りである。授業では、卓球の新リーグであるTリーグ所属のチームであるT、T彩たま担当者の方と連携し、Tリーグの理念、プロスポーツクラブ運営

の業務等、プロスポーツビジネスの現場を学ぶ講義を実施した。そして、現在のプロスポーツクラブ運営における課題を提示いただき、この課題に対する解決策を提案するという授業を構成した。

この講義を受講後、ゼミ学生を複数のグループに分け、卓球のプロスポーツクラブが抱える課題に対する解決策について、オンライン環境を中心にグループワークを実施した。そして、グループワーク後、プレゼンテーションをT、T彩たま担当者の方を招いて実施され、提案内容に対する意見交換がなされた。

## 5. 分析結果

### (1) テキストデータの分析

本研究では、寺井・葦原(2018)を基にゼミナール学生が遠隔システムを通じて回答した自由記述データから、語を抽出し、その共起関係を明らかにした。手続きは、アンケート回収後、自由記述回答内容をExcelに入力後、コーディングルールを作成した。自由記述の感想は、テキスト形式の表記のゆれの統一を行った。オンラインをOnline、ズームをZOOM、ラインをLINEとした。共起ネットワークとは、「抽出語またはコードを用いて、出現パターンの似通ったものを線で結んだ図、すなわち共起関係を線(edge)で表したネットワークを描く機能」である。線の太さは、共起関係を表している。

また抽出語の出現数が多いほど大きな円で描かれている。

## (2) オンライン環境における問題解決学習の感想

オンラインでのプロスポーツクラブと連携し

た問題解決学習としてグループワークを実施した。この実践における感想は、KH コーダーを活用し、分析した抽出語の共起ネットワークを図4の通りに示した。その結果、「全員」と「役割」、「分担」、「人」、「形」に関係が表れ、自由記述では、グループワークの成果として、「そ

表2 卓球リーグ所属 T、T彩たまとの連携事業

日時	内容
2020年11月26日	T、T彩たま担当者による講義（対面授業）
2020年12月3日、10日	オンライン環境でのグループワーク、教員との課題資料確認
2020年12月17日	課題解決策のプレゼンテーション実施（対面授業）

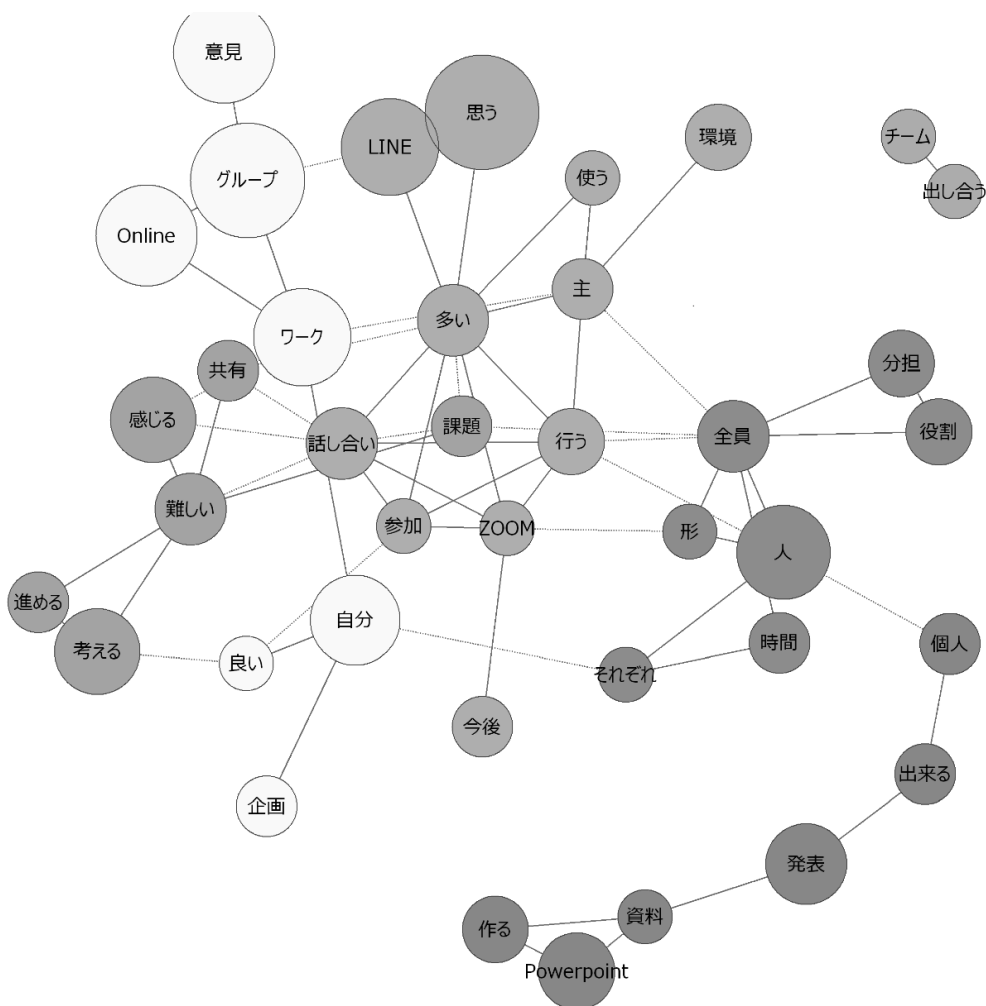


図4 遠隔システムを通じたグループワークの感想





については、図6の通りである。

「先生」が「質疑」、「疑問」、「テーマ」に共起関係が表れ、「疑問」-「ゼミ」-「自分」にも関係があった。「卒業」「論文」「頂く」の3語が相互に関連し、自由記述の中で「沢山の幅広い質問を頂いた。それを調べてさらに深掘りする事で質のいい卒業論文になっていく」と述べられている。

「説明」「考え」「書く」の3語が相互に関連し、自由記述の中で「自分の考えを説明することの難しさを感じました」、「自身の考えについての意見を説明しないといけない」と述べられている。

#### 4. まとめと課題

問題解決型学習として、プロスポーツクラブの現場で生じている課題を、遠隔教育を通じたグループワークにより実践した。グループ毎に、非対面での microsoft teams, SNS, ZOOM といった情報伝達手段を活用し、意見交換、発表資料作成を行った。アンケート回答では、「グループワークについては、何度もオンライン通話をして、意見の交換をしました。」、「事業計画や具体的な案をチームのみんなと意見を出し合って取り組めたことはとても良い経験になりました。」、「Onlineではあるがグループワークができるのはコミュニケーションも取れて楽しかった。」という成果に繋がる記述がみられた。

課題に関する記述は、「オンラインという事で、情報の伝達に時間がかかったり」、「コロナウイルスという事も合って上手く話し合いが出来なかったり参加するメンバーが全員揃わなかった」、「ほぼ Online のみのグループワークは初めてだったため、難しかったことが多かった。」、「Online で会議をするというのは凄く楽な反面メリハリの部分において結構出来ないパターンも多くありました」との記述がみられた。

遠隔通信システムを活用した他大学との合同授業では、「自分とは全然違う考え方などをし

ていていろいろな視点からの考えは、どんな物事に対しても必要なものだと思うので、とても有意義な時間」、「是非またこのような討論をしたい」、「オンラインではなく直接グループワークをしてみたらさらに深く考えることができるので、いつかコロナが終息したら合同ゼミをまたやりたい」との肯定的な意見がみられた。

今後の課題に関する記述として、「オンラインという状況もあって聞き取りにくかったり、会話を成り立たせるのが難しくディスカッションには少し物足りなさを感じた」という意見もあり、今後の合同ゼミ運営について、内容、時間、方法の改善を行う必要性が示唆された。

オンライン環境でのプロジェクト学習として、ゼミナール学生の研究テーマ発表を実施した。この実践に対する感想として「ここからさらに自分のテーマをより調べて来年までにしっかりといい卒業論文に出来るようなベースだけでも作っていけたら良い」、「幅広い質問を頂いた それを調べてさらに深掘りする事で質のいい卒業論文になっていく」とオンライン環境における学生間、教員間での意見交換による学びの成果につながる感想も見受けられた。しかしながら、「今回の発表をして自分の考えを説明することの難しさを感じました」との感想もあり、今後はオンライン環境での発表方法やオンライン環境での双方向授業方法の更なる検討の必要性が示唆された。

問題解決学習のステップとサイクルにおいて、今回の実践では、プロスポーツクラブとの連携により、プロスポーツ現場で生じている課題に対する解決策を考えていく上で、問いや仮説を立て、不足する知識を見定め、新しい知識の活用までのステップが、グループワークを通じて学習することが出来たと考える。そしてプレゼンテーションに対するプロスポーツクラブ担当者の方から、示唆を得る事で、再度、グループで立てた問いや仮説の検証を行うことが可能となった。この学習のステップとサイクルを意識した実践を繰り返すことで、充実した学びに



繋がると思われるであろう。

プロジェクト学習のステップでは、オンライン環境の研究テーマの発表から、解決すべき課題や問い、仮説を立てるという段階での課題や先行研究のレビュー方法に対する課題も明らかになった。今後は、この点に対する教授方法を含めた改善が必要であろう。

今回の遠隔教育の実践を通じて、これまでの学習方法とは異なる視点からの学びの可能性が示された。しかしながら、アクティブ・ラーニングの問題解決学習、プロジェクト学習の実施方法、オンライン環境における学生、教員間のコミュニケーション、モチベーションの向上について検討すべき課題が明らかになりました。今後、この点をふまえて、遠隔教育システムを活用した授業改善に取り組むことが必要であろう。また研究課題としては、他大学の実践事例を共有しながら、対面授業とオンライン授業の効果的な併用方法についても継続的に検討、実施、評価していくことが必要になってくると考えられる。

#### 参考・引用文献

- 溝上慎一・成田秀夫 (2016) アクティブラーニングとしてのPBLと探求的な学習. 東信堂, p.8.
- 溝上慎一・成田秀夫 (2016) アクティブラーニ

ングとしてのPBLと探求的な学習. 東信堂, p.11.

溝上慎一・成田秀夫 (2016) アクティブラーニングとしてのPBLと探求的な学習. 東信堂, p.10.

牛澤賢二 (2018) やってみようテキストマイニングー自由回答アンケートの分析に挑戦!ー. 株式会社朝倉書店, p.1

「五輪で背負うものは」日本経済新聞 2014年8月12日 朝刊

「1校1国運動 平昌につなぐ」日本経済新聞 2018年2月7日 夕刊

「大会後の利用 不透明」日本経済新聞 2018年7月28日 地方経済面 東京

公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会, アクション&レガシー, <https://tokyo2020.org/ja/games/legacy/> (最終閲覧2021年1月13日)

寺井美津子・葦原摩耶子 (2018), スポーツ教育を専攻する女子大学生が有するダンスイメージの5年間の比較, ジュニアスポーツ教育学科紀要, 6巻, pp45-54.

樋口耕一, KHコーダー概要, <https://kncoder.net/> (最終閲覧2021年1月13日)

樋口耕一, 共起ネットワーク, [https://kncoder.net/scr\\_r.html#netg](https://kncoder.net/scr_r.html#netg) (最終閲覧2021年1月9日)